川崎医療福祉学会誌　Vol. 15　No. 1　2005　67–74

原　著

パーソナリティと主観的幸福感との関連
— 対人相互作用におけるソーシャル・スキルの役割 —

門田昌子[*1]　寺崎正治[*2]

要　　約

本研究の目的は，体験抽出法を用いて実際の対人相互作用を測定し，パーソナリティと実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの関連，パーソナリティが，対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響について明らかにすることであった．また，使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連について検証した．さらに，質問紙法を用いてソーシャル・スキルを測定し，パーソナリティとソーシャル・スキルおよび主観的幸福感との関連について検討した．

分析の結果，パーソナリティと実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの間には関連が見られず，パーソナリティが対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響については明らかにされなかった．一方，質問紙を用いた分析では，外向者ほど，ソーシャル・スキルが高く，そのことが主観的幸福感の高さをもたらしていることが示された．対人相互作用に関する分析において，有意な結果が得られなかった理由として，分析対象者数の少なさが考えられた．よって，本研究結果から，実際の対人相互作用におけるソーシャル・スキルが，パーソナリティと主観的幸福感との関連を媒介していないと結論付けるのは尚早であると思われた．

対人相互作用におけるソーシャル・スキルの使用と対人相互作用の質との関連については，反応性スキルを使用したと認知している人ほど，質を高く評価し，主張性スキルを使用したと認知している人ほど，質を低く評価することが示された．ソーシャル・スキルの中には，対人相互作用の質を高めるものや低めるものが存在しているのではないかと推察され，今後より多面的にソーシャル・スキルを捉える必要があるだろうと思われた．

緒　　言

主観的幸福感（subjective well–being）に関する科学的研究は，1970年代ごろから始まり，その構造に関する実証的研究において，主観的幸福感は，認知的側面である「人生に対する満足感（life satisfaction）」と，感情的側面である「肯定的感情（positive affect）・否定的感情（negative affect）」から構成されることが示されている（寺崎・綱島・西村，1999）[1]．

主観的幸福感の高さを規定する主要な要因の1つとして，個人のパーソナリティが指摘されている．特に，外向性（extraversion）と神経症的傾向（neuroticism）は，主観的幸福感と強い関連を持つパーソナリティであることが見出されている（Costa & McCrae，1980[2]；寺崎，1994[3]）．すなわち，外向者は，内向者に比べ主観的幸福感が高く，神経症的傾向の高い個人は，低い個人に比べ主観的幸福感が低いことが示されている．

Cooper，Okamura & Gurka（1992）[4] は，社会的活動（social activity）の頻度が高くなるほど，人生満足感と肯定的感情が高くなり，否定的感情が低下することを見出している．また，外向的な個人は，内向的な個人に比べて，パーティゲームやディベートといった他者と共に行う活動の頻度が高いことが指摘されている（Argyle & Lu，1990a）[5]．このことから，外向的な性格の人は，幸福感が高くなるのではないかと考えられる．

対人相互作用（interpersonal interaction）の頻

*1 川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　臨床心理学専攻　*2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
（連絡先）門田昌子　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学

度などの量的側面よりも，相互作用に対する満足度などの質的な側面の方が，より強く主観的幸福感と関連しているという報告もある（Cooper，*et al.*，1992）[6]．

対人相互作用の質を規定する要因の１つに，個人の内的資源であるソーシャル・スキル（social skill）が挙げられる．Argyle & Lu（1990b）[7] は，外向者は内向者に比べ，ソーシャル・スキルが高く，また，神経症的傾向が高い者は低い者に比べ，ソーシャル・スキルが低いことを見出した．このことから，外向者は内向者に比べ，質の高い相互作用を行うことが多く，神経症的傾向の高い者は低い者と比較して，質の高い相互作用を行うことが少ないだろうと推測している．Argyle & Lu（1990b）[8] はさらに，外向性と神経症的傾向，ソーシャル・スキルを説明変数，主観的幸福感を目的変数とした回帰分析を行い，外向性はソーシャル・スキルを高め，このことが幸福感の高さにつながっているという結果を得た．一方で，神経症的傾向の高さは，ソーシャル・スキルの低さと関連し，このことが，幸福感の低さに影響を及ぼすことを見出している．

Argyle & Lu（1990b）[9] の研究は，質問紙によってソーシャル・スキルを測定していたために，外向者，神経症的傾向の高い個人が行う個々の対人相互作用におけるソーシャル・スキルの使用については明らかにしていない．よって本研究では，実際に人が行う個々の対人相互作用におけるソーシャル・スキルを測定することとした．実際の対人相互作用において使用されるソーシャル・スキルとしては，対人コミュニケーションコンピテンス（interpersonal communication competence）の本質的な要素は，主張性（assertiveness）と反応性（responsiveness）である（McCrosky & Richmond，1996）[10] という指摘から，主張性，反応性を取り上げた．

さらに，Argyle & Lu（1990b）[11] は，ソーシャル・スキルの使用が，対人相互作用の質を高めることを暗黙の前提としていたが，本研究ではその点も明確にしたいと考えている．よって，実際の対人相互作用場面において使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連について検討することとした．

実際の対人相互作用を測定する方法としては，Rochester Interaction Record（RIR；Wheeler & Nezlek，1977）[12] を用いることとした．RIR は，体験抽出法（experience sampling method）の一種で，対人相互作用の諸側面を測定することができる．

本研究では，体験抽出法を用いてソーシャル・スキルを測定し，パーソナリティと実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの関連を明らかにすることを目的とした．また，パーソナリティが，対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響を検討することとした．さらに，使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連について検証した．加えて，体験抽出法と比較するために，これまで主として用いられてきた質問紙法を用いてソーシャル・スキルを測定し，パーソナリティとソーシャル・スキルおよび主観的幸福感との関連について検討した．

方　　法

１．調査対象者

大学生153人を対象に，対人相互作用記録票，各種質問紙を実施した．対人相互作用票の有効回答数は37であった．性別による内訳は，男性５人，女性32人であった．平均年齢は19.89歳で，年齢幅は18–28歳であった．各種質問紙の有効回答数は，150であった．性別による内訳は，男性が49人，女性が101人であった．また，平均年齢は19.56歳で，年齢幅は18–28歳であった．

２．対人相互作用記録票

Wheeler & Nezlek（1977）[13] の RIR に基づいて，本研究の目的に沿った対人相互作用記録票を作成した．対人相互作用記録票は，表紙が１枚，記録用紙への記入にあたっての説明と注意点を記載した用紙が１枚，42回分の対人相互作用記録用紙の順で綴じられたＢ５版の小冊子であった．１回の相互作用につき，１枚の記録用紙を使用して記録することとした．実際に使用した記録用紙を図１に示した．

記録用紙は，対人相互作用に関する12の指標を測定できるように作成した．12の指標は，大きく２つに分類される．すなわち，対人相互作用の客観的／量的側面と，主観的／質的側面である．主観的／質的側面を測定する項目は，相手との親しさの程度（7），やりとりに対する全体的な評価（11），やりとりにおける自分の行動に対する評価（12）という３項目であった．これら３項目以外は，客観的／量的側面を測定する項目であった．項目（11）は，対人相互作用の質を測定する指標であり，「楽しかった」「嫌な思いをした」「満足した」という３側面を測定した．項目（12）は，対人相互作用において使用された主張性スキル，反応性スキルの使用程度を測定するものであり，本研究のために作成した．項目作成にあたって，既存のソーシャル・スキル尺度の中から，主張性に関する項目，反応性に関す

(1) 日付：　月　日　(2) 記入時間　時　分
(3) やりとり開始時間　時　分
やりとり終了時間　時　分
(4)相手の数(自分は含めない)　1人　2人以上(　人)
(5)相手の性別　男性　女性
(6)相手の種類　友人　知人　恋人　家族

	1 全く親しくない	2 あまり親しくない	3 少し親しい	4 非常に親しい
(7)相手との親しさの程度	(1	2	3	4)

(8)やりとりの内容　仕事　娯楽
(9)やりとりの状況　直接会っての会話　電話　メール
(10)やりとりの始まり　自分から話しかけた　相手から話しかけられた
(11)やりとりに対する全体的な評価をしてください.

	1 全く当てはまらない	2 あまり当てはまらない	3 少し当てはまる	4 非常に当てはまる
1.楽しかった	(1	2	3	4)
2.嫌な思いをした	(1	2	3	4)
3.満足した	(1	2	3	4)

(12)やりとりにおける自分の行動に対する評価をしてください.

	1 全く当てはまらない	2 あまり当てはまらない	3 少し当てはまる	4 非常に当てはまる
1. 自分の言い分を主張した.	(1	2	3	4)
2. 優しい態度で接した.	(1	2	3	4)
3. 相手の手助けになるように振舞った.	(1	2	3	4)
4. 誠実な態度で接した.	(1	2	3	4)
5. 相手の気持ちに共感した.	(1	2	3	4)
6. 相手の気持ちに合わせて振舞った.	(1	2	3	4)
7. 自分の意見を積極的に言った.	(1	2	3	4)
8. 相手に対して，不満や怒りを示した.	(1	2	3	4)
9. 相手を思いやるような態度をとった.	(1	2	3	4)
10. 自分の気持ちを素直に表した.	(1	2	3	4)
11. 嫌だと思う要求は断った.	(1	2	3	4)
12. 自分の考えは曲げなかった.	(1	2	3	4)
13. 相手を説得しようとした.	(1	2	3	4)
14. 自信のある態度で接した.	(1	2	3	4)
15. 相手を責めた.	(1	2	3	4)
16. 相手の気持ちに敏感であった.	(1	2	3	4)
17. 温かい態度で接した.	(1	2	3	4)
18. 相手と競い合うような態度をとった.	(1	2	3	4)
19. 友好的に振舞った.	(1	2	3	4)

図1　対人相互作用記録用紙

る項目を抽出し，それぞれ，類似した項目は統合するなどして整理した．実際に使用した尺度は，主張性に関しては，社会–コミュニケーション志向性尺度（Socio–Communication Orientation measure, McCrosky & Richmond, 1996）[14]，ソーシャル・スキル尺度（和田, 1991）[15]，デートと自己主張質問紙（Dating and Assersion Questionnaire, Levenson & Gottman, 1978）[16] であった．反応性に関しては，社会–コミュニケーション志向性尺度（Socio–Communication Orientation measure；McCrosky & Richmond, 1996）[17] を使用した．整理した主張性スキル，反応性スキル項目は，実際の対人相互作用場面において使用される主張性スキル，反応性スキルを評価できるような表現に変換した．最終的に，主張性スキル項目10項目，反応性スキル項目9項目が作成された．

3．質問紙

3–1．パーソナリティ質問紙

日本語版アイゼンク性格検査(EPI;岸本,1987)[18] を使用し，分析には，外向性尺度得点，神経症的傾向尺度得点を使用した．各尺度得点が高いほど，外向的であり，神経症的傾向が高いことを意味している．

3–2．ソーシャル・スキル質問紙

Kiss–18（菊池，1988）[19] を使用した．回答形式は，各問に対して，「1：いつもそうでない」から「5：いつもそうだ」までのいずれか1つを選択させる5段階評定で，得点が高いほどソーシャル・スキルが高いことを示す．

3–3．主観的幸福感質問紙

主観的幸福感の認知的側面を測定するために，人生満足感尺度（以下LSMとする，寺崎ら，1999）[20] を用いた．当尺度は，「過去満足」「現在満足」「未来希望」の3つの下位尺度から構成されている．回答形式は，「全く一致しない」から「完全に一致する」までの4段階評定で，得点が高いほど，各人生満足感が高いことを示す．また，感情的側面を測定するために，多面的感情特性尺度・短縮版（寺崎，古賀，岸本，1994）[21] を使用した．「抑うつ・不安」「敵意」「倦怠」「活動的快」「非活動的快」「親和」「集中」「驚愕」の下位尺度を持ち，8つの感情特性を測定できる．回答形式は，「全く感じていない」から「はっきり感じている」までの4段階評定で，得点が高いほど，各感情を強く感じる傾向があることを示す．「活動的快」「非活動的快」「親和」は，代表的な肯定的感情特性であり，「抑うつ・不安」「敵意」「倦怠」は，否定的な感情特性であると考えられている．LSMの下位尺度合計得点を「人生満足感」，「活動的

快」「非活動的快」「親和」尺度の合計得点を「肯定的感情」,「抑うつ・不安」「敵意」「倦怠」尺度の合計得点を「否定的感情」とし,「主観的幸福感の3側面」とみなした.

4．手続き

調査は，異なる対象者に対して，6月24日から7月1日，6月29日から7月6日にかけての2期間行った．各期間とも，講義時間内に，対人相互作用記録票，各種質問紙を配布し，配布後，対人相互作用記録票の記録方法．各種質問紙への回答方法についての教示を行った．各種質問紙は，その場で実施，講義終了後回収することを伝え，対人相互作用記録票は，1週間記録し，次週の同講義終了後に提出することとした．対人相互作用記録票の記録法については，対人相互作用記録票を常に携帯し，5分間以上続いた相互作用について，相互作用を行った後，可能な限り即時に記録するように求めた．am12：00–pm12：00を午前の部，pm12：00–am12：00を午後の部とし，両部とも，各時間内に行った対人相互作用のうち，時間の早いものから，最大3回まで記録することとした．よって，最大42回の対人相互作用が記録可能であった．

結　　果

1．体験抽出法によって測定されたソーシャル・スキルに関する分析

1－1．主張性スキル尺度得点，反応性スキル尺度得点の算出

実際の対人相互作用におけるソーシャル・スキルを測定した19項目に対する対象者ごとの回答結果を基に，因子分析（主因子法，promax 回転）を行った．分析対象者数は37人と少なかったが，作成した質問項目群が2因子から構成されていることの確認のために行った．因子分析の結果，第1因子は,「誠実な態度で接した」などの項目に対して負荷量が高く,「反応性スキル」に関する因子とした．第2因子は,「相手に対して，不満や怒りを示した」などの項目に対して負荷量が高く,「主張性スキル」に関する因子とした．これら2因子の累積寄与率は，.69であった．最終的に,「反応性スキル」項目として9項目[†1)],「主張性スキル」項目として8項目が採用された[†2)]．以上の結果に基づいて,「反応性スキル尺度」「主張性スキル尺度」を作成した．尺度の信頼性を検討するために，Cronbach の α 係数を算出した結果，反応性スキル尺度は $\alpha = .91$，主張性スキル尺度は $\alpha = .91$，であった．各尺度の内的整合性に問題はないと考え，以降の分析では,「反応性スキル尺度得点」「主張性スキル尺度得点」を用いた．各スキル尺度得点は，対象者ごとに算出し，尺度得点が高くなるほど，対象者が，当該のスキルを使用していたと認知していることを示す．

1－2．パーソナリティ，実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキル，主観的幸福感との関連

パーソナリティと対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの関連，パーソナリティが対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して主観的幸福感に及ぼす影響について検証するために，パス解析を行った．パス解析では,「主観的幸福感の3側面」の各々を目的変数,「外向性」あるいは「神経症的傾向」と,「反応性スキル」あるいは「主張性スキル」を説明変数とした．パーソナリティが，対人相互作用において使用されるソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感の3側面に影響を及ぼすというモデルを想定した結果，変数の組み合わせによって，12のモデルが考えられた．モデルの有意性の検定から,「外向性が，主張性スキルを媒介し，否定的感情に影響を及ぼす」「神経症的傾向が，主張性スキルを媒介し，肯定的感情に影響を及ぼす」「神経症的傾向が，反応性スキルを媒介し，肯定的感情に影響を及ぼす」という3つのモデルは有意ではなかった．

表1は，パス解析の結果をまとめたものである．「外向性」が含まれているモデルに関して，表1から,「外向性」は,「反応性スキル」「主張性スキル」に対して，直接的な影響を及ぼしていなかった．また,「反応性スキル」「主張性スキル」は，主観的幸福感のいずれの側面に直接的な影響を及ぼしていなかった．これらの結果から,「外向性が，反応性スキルあるいは主張性スキルを媒介し，主観的幸福感に影響を及ぼす」という間接効果は認められないことが示された．外向性と主観的幸福感との関連については,「外向性」「反応性スキル」が含まれたモデルにおいて，外向性は，肯定的感情と人生満足感に対して，有意な正の直接的影響を及ぼしていた（$\beta = .44$，$\beta = .40$）．また,「外向性」「主張性スキル」が含まれたモデルにおいて，外向性は，肯定的感情と人生満足感に対して，直接的な正の影響を及ぼしていた（$\beta = .47$，$\beta = .42$）．このことから，外向的であるほど，肯定的感情が高く，人生に対する満足感が高いことが明らかとなった．

次に,「神経症的傾向」が含まれているモデルに関しては，表1から,「神経症的傾向」は,「反応性

表1　主観的幸福感の3側面を目的変数，外向性および神経症的傾向，反応性および主張性スキルを説明変数としたパス解析の結果

説明変数＼目的変数	人生満足感		肯定的感情		否定的感情	
	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
外向性	.40*	.03	.44**	.03	-.27	-.02
反応性スキル	.18	−	.15	−	-.11	−
外向性から反応性スキルへの直接効果						.22
外向性	.42**	.01	.47**	.00	-.33*	.02
主張性スキル	.16	−	.08	−	.30	−
外向性から主張性スキルへの直接効果						.09
神経症的傾向	-.44**	-.01	-.23	-.00	.57**	.00
反応性スキル	.25	−	.24	−	-.15	−
神経症的傾向から反応性スキルへの直接効果						-.04
神経症的傾向	-.49**	.00	-.26	.02	.55**	.02
主張性スキル	.06	−	.16	−	.19	−
神経症的傾向から主張性スキルへの直接効果						.14

**: $p<.01$, *: $p<.05$

スキル」「主張性スキル」に対して，直接的な影響を及ぼしていなかった．また，「反応性スキル」「主張性スキル」は，主観的幸福感のいずれの側面にも，直接的な影響を与えていなかった．これらのことから，「神経症的傾向が，反応性スキルあるいは主張性スキルを媒介し，主観的幸福感に影響を及ぼす」という間接効果は認められなかった．神経症的傾向と主観的幸福感との関連については，「反応性スキル」が含まれたモデルにおいて，神経症的傾向は，否定的感情に対して，有意な正の直接的影響を持ち（$\beta=57$），人生満足感に対して，有意な負の直接的影響を持っていた（$\beta=-.44$）．同様に，「主張性スキル」が含まれたモデルにおいて，神経症的傾向は，否定的感情に対して，有意な正の直接的な影響を及ぼし（$\beta=.55$），人生満足感に対して，有意な負の直接的な影響を及ぼしていた（$\beta=-.49$）．このことから，神経症的傾向が高いほど，高い否定的感情を持ち，人生に対する満足感が低いことが示された．

1−3．実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連

実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連を検証するために，反応性スキル使用得点，主張性スキルの使用得点と，「楽しかった」得点，「満足した」得点「嫌な思いをした」得点との相関分析を行った．その結果，反応性スキルを使用したと報告した人ほど，対人相互作用を「楽しかった」「満足した」と評価していた（$r=.51$，$r=.72$，$p<.01$）．また，主張性スキルを使用したと報告した人ほど，「嫌な思いをした」と評価していた（$r=.38$，$p<.05$）．これらの結果から，反応性スキルを使用したと感じるほど，対人相互作用の質を高く評価しているのではないかと考えられた．一方で，主張性スキルを使用したと感じるほど，相互作用の質を低く評価しているのではないかと推測された．

2．質問紙によって測定されたソーシャル・スキルに関する分析

2−1．パーソナリティ，質問紙によって測定されたソーシャル・スキル，主観的幸福感との関連

パーソナリティ，質問紙法によって測定されたソーシャル・スキル，主観的幸福感との関連について検証するために，パス解析を行った．パス解析では，「主観的幸福感の3側面」の各々を目的変数，「外向性」あるいは「神経症的傾向」と「ソーシャル・スキル」を説明変数として，「パーソナリティが，質問紙によって測定されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす」というモデルを想定した．変数の組み合わせによって，6つのモデルが想定された．表2は，パス解析の結果をまとめたものである．

表2から，「外向性」が含まれているモデルに関して，外向性は，肯定的感情，人生満足感に対して，正の直接的影響を持っており（$\beta=.32$，$\beta=.25$），否定的感情に対しては，負の直接的影響を持っていた（$\beta=-.20$）．すなわち，外向的であるほど，主観的幸福感が高いことが確認された．また，外向性は，ソーシャル・スキルに対して，直接的な正の影響を及ぼしていた（$\beta=.48$）．さらに，ソーシャル・ス

表2　主観的幸福感の3側面を目的変数，外向性および神経症的傾向，Kiss-18によって測定されたソーシャル・スキルを説明変数としたパス解析の結果

説明変数＼目的変数	人生満足感		肯定的感情		否定的感情	
	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
外向性	.25**	.11	.32**	.09	-.20*	-.08
ソーシャルスキル	.24**	−	.19*	−	-.17*	−
外向性からソーシャルスキルへの直接効果						.48**
神経症的傾向	-.27**	-13.2	-.17*	-.04	.47**	-.02
ソーシャルスキル	.33**	−	.32**	−	-.20**	−
神経症的傾向からソーシャルスキルへの直接効果						-.14

**: $p<.01$, *: $p<.05$

キルは，人生満足感，肯定的感情に対して，正の直接的影響を及ぼしており（$\beta=.24$, $\beta=.19$），否定的感情に対して，負の直接的影響を及ぼすことが示された（$\beta=-.17$）．これらの結果から，外向的であるほど，ソーシャル・スキルが高く，ソーシャル・スキルの高さが主観的幸福感の高さに影響していることが明らかとなった．一方，「神経症的傾向」が含まれているモデルに関しては，神経症的傾向は，否定的感情に対して，正の直接的影響を及ぼしており（$\beta=.47$），人生満足感，肯定的感情に対して，負の直接的影響を及ぼしていた（$\beta=-.27$, $\beta=-.17$）．よって，神経症的傾向の高い人ほど，主観的幸福感が低いと考えられた．また，ソーシャル・スキルは，人生満足感，肯定的感情に対して，直接的な正の影響力を持ち（$\beta=.33$, $\beta=.32$），否定的感情に直接的な負の影響力を持っていた（$\beta=-.20$）．しかし，神経症的傾向は，ソーシャル・スキルに対して，直接的な影響を及ぼしていなかった．よって，神経症的傾向の高い個人は，低い個人に比べ，ソーシャル・スキルが低く，そのことが主観的幸福感の低さをもたらしているという結果は得られなかった．

考　　察

本研究では，パーソナリティと実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの関連，パーソナリティが，対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響についてパス解析を用いて検討した．また，使用されたソーシャル・スキルと対人相互作用の質との関連について相関分析を行った．さらに，質問紙法を用いてソーシャル・スキルを測定し，パーソナリティとソーシャル・スキルおよび主観的幸福感との関連についてパス解析を用いて検証した．

パーソナリティと実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルとの関連については，当該の変数間に関連は認められなかった．よって，パーソナリティが，対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響については明らかにされなかった．よって，外向的な個人は，内向的な個人に比べ，ソーシャル・スキルを使用して質の高い対人相互作用を多く経験しているために幸福感が高いのではないかという推測は確かめられなかった．また，神経症的傾向の高い個人は，低い個人に比べソーシャル・スキルの使用程度が低く，質の高い対人相互作用の経験が少ないために，幸福感が低いのではないかという推測は確認されなかった．

パーソナリティが，質問紙によって測定されたソーシャル・スキルを媒介して，主観的幸福感に及ぼす影響については，外向者ほど，ソーシャル・スキルが高く，そのことが主観的幸福感の高さをもたらしていることが示された．

2つのパス解析からは，異なる結果が得られた．すなわち，質問紙を用いた分析では，ソーシャル・スキルは，パーソナリティと主観的幸福感との関連を媒介する変数であったが，対人相互作用に関する分析では，そうではなかった．この結果に関して，分析対象者数の問題が考えられた．質問紙分析における分析対象者数は150人であり，対人相互作用に関する分析の分析対象者数は37人であった．対人相互作用に関する分析対象者数が少なく，それは，分析対象となる対人相互作用イベントの数が少ないことを意味している．質問紙分析では，充分な分析対象者数が確保されていたために，有意な結果が示されたと考えるならば，対人相互作用イベントの数が増加すれば，実際の対人相互作用において使用されたソーシャル・スキルが，パーソナリティと主観的幸福感の関連を媒介するという結果が得られる可能性がある．よって，本研究結果から，実際の対人相互作用におけるソーシャル・スキルが，パーソナリティと主観的幸福感との関連を媒介していないと結

論付けるのは尚早であると思われた．

対人相互作用におけるソーシャル・スキルの使用と対人相互作用の質との関連については，反応性スキルを使用したと認知している人ほど，質を高く評価し，主張性スキルを使用したと認知している人ほど，質を低く評価することが示された．ソーシャル・スキルの中には，対人相互作用の質を高めるものや低めるものが存在しているのではないかと推察され，今後より多面的にソーシャル・スキルを測定することの必要性が示されたと考えられた．

本研究結果は，分析対象者数，記録されたイベント数の影響を強く受けているように思われた．これまでの研究において，対人相互作用などの体験を即時に測定する場合，対象者の負担は増加し，結果として対象者数の減少という問題が生じることが指摘されている（水子，1998）[22]．よって，今後の研究では，いかにして，参加者数，イベント数を増加させるかが課題となると思われ，参加報酬の設定や，対象者の負担を減少させる簡便な相互作用測定ツールの開発が必要とされると考えられる．

本研究は，平成15年川崎医療福祉大学プロジェクト研究費（研究代表者，寺崎正治）の助成を受けて行われた．

注

†1）：「反応性スキル」項目は，図1に示した（12）やりとりにおける自分の行動に対する評価項目のうち，項目番号2，3，4，5，6，9，16，17，19であった．

†2）：「主張性スキル」項目は，図1に示した（12）やりとりにおける自分の行動に対する評価項目のうち，項目番号7，8，11，12，13，14，15，18であった．

文　　献

1）寺崎正治，綱島啓司，西村智代：主観的幸福感の構造．川崎医療福祉学会誌，**9**(1)，43–48，1999．

2）Costa PT and McCrae RR：Influence of extraversion and neuroticism on subjective well–being：happy and unhappy people. *Journal of Personality and Social psychology*，**38**(4)，668–678，1990．

3）寺崎正治：多面的感情状態尺度の作成と性格研究への応用．磯博行，杉岡幸三（編），情動・学習・脳，初版，二瓶社，大阪，139–150，1994．

4）Cooper H，Okamura L and Gurka V：Social activity and subjective well–being. *Personality and Individual Differences*，**13**(5)，573–583，1992．

5）Argyle M and Lu L：The happiness of extraverts. *Personality and Individual Differences*，**11**(10)，1011–1017，1990a．

6）前掲書 4）

7）Argyle M and Lu L：Happiness and social skills. *Personality and Individual Differences*，**11**(12)，1255–1261，1990b．

8）前掲書 7）

9）前掲書 7）

10）McCrosky JC and Richmond VP：Communication competence，*Fundamentals of human communication：An interpersonal perspective*. Prospect Heights，Waveland，90–93，1996．

11）前掲書 7）

12）Wheeler L and Nezlek J：Sex differences in social participation. *Journal of Personality*，**35**(10)，742–754，1977．

13）前掲書 12）

14）前掲書 10）

15）和田実：対人的有能性に関する研究　—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャル・スキル尺度の作成（資料）．実験社会心理学研究，**31**(1)，49–59，1991．

16）Levenson RW and Gottman JM：Toward the assessment of social competence. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*，**46**(3) 453–462，1978．

17）前掲書 10）

18）岸本陽一：日本版アイゼンク性格検査（EPI）の信頼性に関する研究．近畿大学教養部研究紀要，**18**(3)，1–12，1987.
19）菊池章夫：思いやりを科学する，初版，川島書店，東京，197–200，1988.
20）前掲書 1）
21）寺崎正治，古賀愛人，岸本陽一：感情状態尺度による特性評価．日本心理学会第58回大会発表論文集，939–939，1994.
22）水子学：日常生活における対人相互作用と感情との関連 —大学新入生の適応に関する追跡調査—．川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科修士論文（未公刊），1998.

（平成17年5月10日受理）

The Relationships Between Personality and Subjective Well-Being — The Roles of Social Skills in Interpersonal Interaction —

Masako KADOTA and Masaharu TERASAKI

(Accepted May 10, 2005)

Key words : personality, subjective well-being, social skills

Abstract

This study was conducted in order to examine following relationships: (1) personality (extraversion and neuroticism), social skills (assertive skills and responsive skills) measured by experience sampling method (ESM), and subjective well-being (SWB); (2) social skills measured by ESM and the quality of interpersonal interaction (pleasant, satisfied, unpleasant); (3) personality, social skills measured by questionnaire, and SWB.

The following results were found: (1) no relationships existed between personality and social skills measured by ESM, and social skills were not mediator between personality and SWB. (2) assertive skills correlated with the estimation of "unpleasant", positively, otherwise, responsive skills have positive correlation with the estimation of "pleasant" and "satisfied", respectively. (3) social skills measured by questionnaire mediated between extraversion and SWB. In future research, it is necessary for clarifying its effects on the quality of interpersonal interaction to grasp social skills widely.

Correspondence to : Masako KADOTA

Doctoral Program in Clinical Psychology, Graduate School of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 67–74)